

樋口知志著

## 『阿弓流為』

——夷俘と号すること莫かるべし——

(ミネルヴァ日本評伝選)

ミネルヴァ書房 一〇一三・一〇刊  
四六 三五二頁 三〇〇〇円

本書は、東北への支配を拡大・強化する古代国家に対峙した、阿弓流為という人物と彼が生きた時代像とを捉え直そうとしたものである。

阿弓流為は同時代の史料には四度見えるのみの人物であり、それらからその人となりを直接知ることは全くできない。陸奥国胆沢地方のエミシの族長として、国家軍を一度は破るなど長く抵抗を続けたものの、最終的には国家側に降伏し斬刑に処されたというくらいが確実なところであって、それ以上は時代背景や状況証拠などから読み解いていくほかない。

そうした人物の評伝という、もとより無謀のような企画にも思える本書ではあるが、これまでも最新の考古学的成果を取り入れながら従来の見方にとらわれない史料解釈を試みてきた著者の姿勢によって、新たな阿弓流為像および八世紀後半の東北情勢についての叙述を世に問うものとなっている。

本書で最も注目されるのは、生没年ともに不詳の阿弓流為の年齢を大まかに推定し、その生涯を八世紀の東北史に位置づけ直し

たことである。阿弓流為がエミシと国家との戦争のなかった比較的平和な時代に生まれ育った「戦後世代」であったという指摘は、近年は不条理な国家側の圧政や侵略に対するエミシ側の「正義」のヒーローとして語られがちな阿弓流為像に警鐘を鳴らす。南北間の交易拠点があった胆沢地方の新興のエミシ豪族、大墓公一族の族長である阿弓流為は、国家側社会とエミシ社会との平和共存関係による利益の享受者であったというのが著者の見立てである。ゆえに、阿弓流為による国家への抵抗は、単なる憎しみや報復といった次元からではなく、最終的に国家とエミシ社会との平和・共生を実現するためのものとして描かれる。国家とエミシとを単純に対立させる二元論的な古代東北史像は克服されるべきである。

本書では、発掘調査成果を含む近年の研究の進展を紹介しながら、阿弓流為という人物を産んだ時代背景や国家とエミシとの戦争の経緯を読み解いていく。その一方で、著者も認める通り推測に推測が重ねられた文章も少なくないため、読者によってはどこまでが確実な史実と言えるのか混乱する部分があるかもしれない。ただ、国家側の大敗としてのみ捉えられてきた延暦八年の征夷を、エミシ側に与えた損害も大きかったと評価し直していることなど、著者自身の研究によって新たに史料の理解が深められた点も多い。敢えて阿弓流為という直接的史料の限られる個人の生涯に焦点を当てたことが、東北史を見直す試みに益するところは小さくなかったと思われる。本書に示された歴史叙述に対する検証・批判が今後重ねられていくことで、古代国家とエミシとの間で繰り広げ

られた歴史の実像が、より明確になっていくことを期待したい。

(大高広和)